４青総高第２１１１号
令和５年３月３１日

令和４年度　全日制課程　学校経営報告

東京都立青梅総合高等学校長
鈴木　信也

１　今年度の取組と自己評価

【　「やり抜く力」の育成と「新しい日常」を意識した取組の推進　】

（１）教育活動の目標と方策

①　学習指導（「考えさせる授業」の定着）

ア　青総スキルの活用等により「考えさせる授業」の一層の推進ができた。

イ　各教科が一人１台端末を活用し、授業外学習時間の増加が図れた。

ウ　生徒の課題解決意欲を引き出す授業を推進した。

エ　教科の枠を超えた相互授業見学や課程や学校の枠を超えた研究授業参加等から、そこで得られた改善点を生徒に還元することで、特に若手・中堅教員の授業力向上につながった。

オ　「やり抜く力」を合言葉に、生徒に希望進路実現に沿う学力や実践力を目指させた。

カ　教職員のデジタル技術の活用力を高め、オンライン学習活用の着実な定着を図った。

キ　コロナ禍でも農工大・東農大との高大接続を具体的に推進し、特色化を図った。

（自己評価）考えさせる授業の定着は十分とは言えない事が課題であるが、教員の意識変化が生徒に伝わっている。結果として課題解決意欲の向上が見られ、生徒は高い目標に挑戦するという文化が根付き始めた。教員のデジタル技術の向上により、授業力向上のための相互授業観察が活発になった。

②　進路指導（「やり抜く力」を発揮させる）

ア　「自分でつくる、自分の未来」を実現させる指導を、進路指導部を中心として組織的に展開させた。

イ　「やり抜く力」を育てるため自己肯定感を育み、希望進路実現に挑戦する意欲の向上が図れた。

ウ　教科会で模試等の結果に基づく分析会を実施させ、教科で対応策を検討し改善させた。

エ　進路指導部が主導してコンパス（模試結果一覧）等のデータを活用し、各年次の学力分析を実施した。

（自己評価）「やり抜く力」の育成を今年度の課題として取り組ませた結果、国公立や難関大学受験をし合格をつかむ生徒が増加するとともに、なりたい自分を目指し高い目標にチャレンジする生徒も結果を出した。今年度の希望進路満足度は、９２％であった。昨年度９３％。学力分析を組織的に実施し、進路実現のためそれをスタディーアプリにつなげた結果である。

③　生活指導・安全指導（規律ある学校生活の定着）

ア　生徒が自ら誇りをもって、主体的に本校の生活規律を守り改善する態度を育成した。

イ　いじめの未然防止・早期発見・早期対応に取り組むため、学校いじめ防止対策委員会機能や学校カウンセリング機能を充実させ、学校全体で情報共有し、いじめ総合対策に基づいた対応をより推進した。

ウ　教職員同士が体罰に対して相互に看過しない学校づくりのため校内研修を通して構築した。

エ　青梅総合ＳＮＳルールは、生徒会が中心に検討・改善し生徒へ周知していく環境を定着させた。

オ　自転車安全運転指導推進校として、組織的に安全指導の徹底を図った。

（自己評価）本校で初めて３者懇談会（生徒会生徒、PTA、生活指導部教員）を実施し、それぞれの立場から校則の必要性や見直しの議論をした。結果、生活指導では具体的な細かい指導は無くし、生徒の自律を

促すとともに、保護者もしつけの面から指導していくという方向で一致した。ただし、全教員の同一認識の指導については、校則解釈や言い方に個人差がありそれを埋めていくことが課題である。自転車安全運転指導の実施は、他の安全指導にも波及し、生徒一人ひとりが一層の意識として安全を捉えるようになった。不適正なSNS利用状況は無かったが、表面に出てこない案件が存在しているという姿勢で、今後も生徒会とともに啓蒙活動を継続させなければならない。

④　特別活動・部活動（「やり抜く力」の実践的育成）

ア　各行事では、感染予防策と時間管理等を徹底した上で、生徒の達成感を高める工夫をした。

イ　事前指導を徹底し、実行委員が自らの判断で動けるような自律的な行動力を育んだ。

ウ　体罰や不適切な言動のない指導を前提に、生徒が主役の部活動づくりを一層推進した。

エ　「Sport-Science Promotion Club」の指定（剣道部）を受け、運動部・文化部ともに相乗作用として部活動の活性化を図った。

オ　姉妹校交流推進校としてのドイツとの交流やサブカテゴリー国との交流は、実現しなかった。国際交流というレガシー構築は推進できた。

カ　TOKYO GLOBAL GATEWAY事業を活用したグローバル人材育成を、１・２年次全員参加で実施した。

（自己評価）各行事（音楽の日、文化祭、体育祭、マラソン大会等）とも感染予防を徹底し、生徒が主語になる取り組みを推進した結果、盛り上がりとメリハリのある母校愛を育む活動となり、生徒たちは笑顔になった。オリンピアン（女子バスケットボール）の来校では、生徒たちに感動と興奮を呼び起こし、以降の部活動に「やり抜く力」の大きさを意識した取組につながった。国際交流については時差の関係からオンラインすらできなかった。日本国内や世界情勢をにらみながら再開することが課題である。

⑤　心身の健康づくり（健康生活への組織的対応）

ア　通級の対応を含めて、相談業務の見える化を一層推進した。

イ　教員の受容的態度を基本に日常的に生徒の状況を把握し、全教員が必要な情報を共有するとともに、各学期初めには生徒の状況確認を確実に行い、心身の健康づくりと早期ケアを一層充実させた。

ウ　配置されているスクールカウンセラーを活用した校内研修等を通じて、学校の相談体制・教員のカウンセリングマインドの向上を図った。

エ　特別な支援が必要な生徒への共通理解と組織的な対応を推進するため、今年度も特別支援コーディネーターを２名体制にして特別支援教育を推進し、個別案件に丁寧に対応した。

オ「アクティブプラン to２０２０」に基づいて体力向上を図り、心身の健康づくりを一層推進した。

カ　年３回の全校アンケート及び適宜実施している２者面談等の結果を学校全体で共有することにより、生徒の心身の悩みに個別に対応するとともにいじめ撲滅を強く推進した。

（自己評価）通級について保健相談部主任を中心に内部指導教員と外部支援者が対応し、その過程を企画調整会議で詳細に報告したことで、都教委の新たな施策の浸透が図れた。内部指導教員も来年度の受講人数に合わせて、自ら手を挙げる教員が出てきた。カウンセリングマインド向上のため、スクールカウンセラーを講師に、若手教員を中心に指名して校内研修に参加させた結果、生徒の言葉を傾聴し余裕ある対応が身についてきている。いじめは確認されていないが、SNSの不適切利用の禁止については今後も指導しなければならない。コロナ禍にあって体力が低下している現実を踏まえ、今後はその向上に向けた全校的な取組（例えばラジオ体操の習慣的実施等）が課題である。

⑥　募集広報活動（情報発信・提供の強化と地域連携）

ア　ツイッターやホームページの随時更新により、本校の教育活動をタイムリーに発信し、中学生やその保護者、地域の方々の本校に対する興味・関心の向上を図った。

イ　個性ある総合学科として、その取り組みや成果の「見える化」をより推進し情報提供した。
ウ　近隣中学校と連携を図り、中学校教員や中学生保護者の総合学科理解を一層推進した。
エ　学校説明会や合同説明会等において本校理解を推進するため、効果的で印象的な広報手段を検討し、期待に応える総合学科としてアピールした。

（自己評価）ホームページ更新４５０回以上、学校説明会参加者約２５００名。「自分でつくる、自分の未来」を目指す高校としての本校アピールはでき、新入学者は昨年同様高い成績であった。しかし、学校の特色や進路実績をアピールするほど「意志の強い者が選択する高校」と誤解され、中学時代と変化の少ない普通科や大学付属私立高校に本来の応募者が変更した可能性があり、その分析と本校アピールの内容や方法等の検討が課題である。

⑦　学校経営・学校運営（連携と育成、体制の確立）
ア　西部学校支援センター支所との連携を密にし、人材育成や教科対応ができた。
イ　OJT を活用して各職層の人材育成を図り、課題解決に取り組む活気ある校内体制を推進した。
ウ　生徒や保護者、地域住民からのアンケートに基づいた「期待に応える学校づくり」を推進した。
エ　管理職が率先して「ライフ・ワーク・バランス」を示し、計画的な仕事の進め方により業務の効率化を徹底し、全教職員の働き方改革プランを推進した。

（自己評価）センター支所との連携では主任教諭選考４名が合格し、本校の組織化がさらに進んだ。来年度も対象となる教諭に応募を促し、人材育成をより推進していくことも課題である。OJT は分掌内・年次内で年間を通じて実施することで若手教員がより良い成長を見せている。これらのことは「期待に応える学校づくり」に欠かせない事であり、こういった部分をさりげなくアピールする方法を検討していきたい。進路実績の向上・生徒の実態に合わせた校則改善・PTA との連携・地域防災拠点としての開かれた学校づくり等と期待に応えてきたが、様々なアンケートや実際の声等をもとにさらに学校改革を推進していかなければならない。

（２）　次年度以降の課題と対応策
①　「やり抜く力」の育成　　AI 時代にたくましく生きる態度や勇気の育成
②　「考えさせる授業」の定着　青総スキルの一層の活用、ルーブリックの活用推進
③　募集・広報活動の見直し　中学生目線での本校アピールの検討、効果的な訪問場所の検討
④　教職員のデジタル技術の活用力向上　校内研修会・ICT 活用授業の研究授業実施、定時制と交流
⑤　読書活動の推進　　授業や HR 等も含めた教育活動全体で図書館の意図的活用を推進
⑥　授業外学習時間の増加　　各教科が計画的に推進。補習・補講体制の確立。自習室の積極的な活用
⑦　高大接続改革　　「自分でつくる、自分の未来」の実現と目標設定のため新規開拓

令和４年度の数値目標と昨年度の実績

数値目標	令和４年度　数値目標	令和４年度　実績
①　進路決定率	１００％	１００％
②　進路決定満足度	９３％	９２％
③　特色ある大学等合格者数 ア　農業系大学合格者 イ　看護系大学等合格者	 ア　１５名 イ　希望者全員合格	 ア　3名 イ　１６名希望者全員合格
④　資格取得 ア　英語四技能（GTEC：GRADE4） イ　英語検定準２級以上 ウ　漢字検定準２級以上 エ　情報処理検定各種２つ以上合格 オ　農業関係資格検定 カ　秘書実務検定（講座選択で受検）	 ア　１００名 イ　１００名 ウ　３０名 エ　講座選択者全員合格 オ　〃 カ　１５名	 ア　１３７名 イ　８０名 ウ　２８名 エ　１９名希望者全員合格 オ　１８名選択者全員合格 カ　１４名
⑤　部活動加入率	９１％	９２％
⑥　ツイッター・ホームページ　更新数	３６０回	４７０回
⑦　図書館貸出冊数	３１００冊	２７２５冊
⑧　学校説明会等参加人数 （中学生・保護者合計）	３０００名	２４７０名
⑨　入学者選抜応募倍率 ア　推薦入学 イ　学力検査	 ア　２．５０倍 イ　１．３０倍	 ア　２．４４倍 イ　１．０４倍
⑩　農業科・家庭科 地域連携活動回数	３０回	３１回
⑪　学校満足度（肯定的回答） ア　生徒 イ　保護者	 ア　１００％ イ　１００％	 ア　８８％ イ　９４％